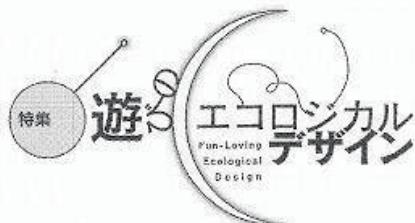


# 廃材天国 秋山 隣さんの 「遊びのエコロジカル デザイン」ライフ

文・写真・秋山 隣



廃材天国



「遊びのエコロジカルデザイン？」ウチでは当たり前の日常の生活デザインのことです」  
こう言うのは、廃材で自邸を建て、ジャバニーズ・バーマカルチャーを実践し、  
家族や友人、地域の人たちとともに生活を、文字通り  
「遊びのエコデザイン」として楽しむ香川県丸亀市在住の秋山氏。  
秋山氏の生き方からは、多くの人がよく軽い気持ちで使う次代の「地球環境時代」ということばが、  
確信として見えてくるようだ。

## はじめに

### 【秋山隣氏プロフィール】

1994年より備前焼の世界に弟子入り。備前焼という世界を中から見てお金と権力に注ぐエネルギーに違和感を持つ。備前焼の組織に属さず、自ら穴窯6基を自作し、コンテナハウスで生活するアウトローの陶芸家小向一實氏に出会う。3年間修行した備前を後に帰郷。

1996年、父(公務員から陶芸家に転身)と共に丸亀で独自の焼き締めをスタート。自給自足の生活や自然農、バーマカルチャー、廃材の家作りなどに憧れる。

2000年から、香川県三豊市の山を借り、全くプロに頼まず、材料も釘やビス以外は全て廃材というはとんどタダの家作りをスタート。

2001年春、約14か月で工房、住居、全長7mの穴窯完成。それと同時に結婚、当時10歳の冬也がもれなく付いて来る。つれあいの影子も「どうせ家つくるんなら電気もガスもなしの方がおもしろそう」と建築中から指示。電気やガスや水道も自分で工事。不耕起自然農の田畠をはじめ、鶏、ヤギを飼い、五右衛門風呂に薪ストーブ、パンやピザの石窯も装備。

2002年、次男野遊を自宅出産。

2003年、工房に隣接させ、常設の展示場完成。

2004年、三男土歩をこれまた自宅出産。家族5人で年収約100万、月の光熱費3、4千円、食費1万円で準自給自足の生活を実現。

2005年、実家の農地(丸亀)に廃材ハウスパート2をスタート。

2006年3月と10月、テレビ朝日「錢形金太郎」に出演。月に一度のペースで元吉本興業の芸人で映画監督の「てんつくマン」率いる「107+1天国はつくるもの2」の撮影舞台となっている小豆島に呼ばれる。石窯やおくどさん、廃材の家作りや陶芸のワークショップを指導。

2007年、一日自給自足体験(陶芸、薪のピザ、マクロビスイーツ、豆腐作り、手打ちうどん……)を展開&成功。12月、初めて助産婦さんなしの自力出産、長女に誕生。

2008年、3年以上かけて廃材ハウスパート2、ずっと完成。一軒目のトタンやスレートのパラック風とは違い、木、土、石、と自然素材の廃材で作る。2階建ての工房(12坪)、平屋の母屋(30坪)、五右衛門風呂、コンポストトイレ、手掘りの井戸、料理も薪に切り替え、月2000円程の電気以外のエネルギーを自給。「廃材天国」と命名。ライブ、講演会、など開催。

2009年、4坪の離れ完成。

## 価値観の転換

何故廃材で？ しかも自分で素人工事で家を建て、子どもと生活しているのか？

「それが僕のしたいことだから！」

としか答えられない。

塩見直樹さんの「半農半X」という本がある。半分は農に関わり、自給的なお金のかからない生活をして、後の半分は自分の天職(好きなこと)をするという理想的なライフスタイル。田舎で古民家に住み、田畠をしながら家族で音楽活動をする友人が居る。彼らはまさに半農半Xの典型。街の生活で現金がないとほんとに貧乏という生活になるけど、田舎の暮らしはベースにお金がかからない。でも、田舎は田舎で見栄を張り、新しい家、新しい車という価値観も依然根強い。

では何故自分のしたい事が見つからないのか？ それはズバリ6、3、3、4の学校教育と、テレビと新聞の情報操作と洗脳だろう。そこでは人と違てる事を否定され、コンプレックスを持たざるを得ない。社会的な競争ごっこをやってるわけだ。そして競争に勝つ事、お金が儲かる事ばかりがフォーカスされ、権力とお金によるヒエラルキーが成り立っている。



廃材天国全景

発展する事はいいことと学校では教えられる。でもそれは他の国から搾取して成り立つ文明的で経済的な発展でしかない。国連の言う「持続可能な開発」とはそもそも矛盾がある。これからの人類が進化するとすれば精神的な分野においてが最も重要なになってくるだろう。

のっけから核心的な話になったが、20代前半の僕が備前焼という巨大なピラミッド組織の構造を中から見た違和感は間違ってなかったといえそうだ。

その後の環境活動や有機農業、自然養鶏、自然農に傾倒していったのも自然な流れかもしれない。

### 備前焼の弟子時代

弟子の僕は立派な窯に美しい工房に作品を展示している備前焼の先輩方を見て思った。この設備の借金なり、経費を払う為に日々、生産し続けるといけないルーティンのサイクルは絶対に楽しくない。

ましてや陶歴に○○展入選という賞歴が付けば付く程、作品の値段の0の数が増えていくような権威と金の直結した分かりやす

くも情けない事のために僕は陶芸の弟子に入った訳ではない。環境問題や経済問題に关心の無かった僕でも、その直感を感じる心は持っていた。そして、その直感は環境や経済、政治、原子力、戦争といろんな社会問題を勉強すればするほど、確信に変わっていた。そして、お金が大きく動く組織に関しては政治も会社も工芸でも、この図式は同じやなーと理解した。

自分がそういうアンテナを張っていたら、すばらしい本にも出会うし、そういうピラミッドから外れて自由に生きている先輩達にも出会えた。東京から単身で備前にIターン入り、ツルハシで15mの穴窓を作り、コンテナハウスで生活している、アウトロー陶芸家との出会いで、「絶対、こっちの方が楽しそう!」と僕の直感はビビッと来た。

### 環境問題への目覚め

何よりも、僕の目を覚ましてくれたのは、NPO法人「ネットワーク地球村」という環境団体の講演会だ。それまで、環境問題、政治経済など、社会問題に全く关心の無かった僕は「こんなに豊かな国で何不自由なく

生活できているのに、国が悪いとか言うよりも自分の好きな陶芸に集中した方がよっぽどいい」ぐらいにしか考えて無かった。もちろん、様々な問題の現実を知りもしないで。

映画「マトリックス」で主人公のネオがモーフィアスに現実を見せられる「赤いカプセル」とこのまま眠り続ける「青いカプセル」の選択を迫るシーンで、ネオは「赤いカプセル」を選択した。僕もまた、「ネットワーク地球村」の講演会で「赤いカプセル」を選択して、現実を知った。

世界には知って、目や耳を塞ぎたくなる現実があまりにも多すぎる。

何故、戦争は終わらないのか?

何故、ガンが増え続けるのか?

何故、自殺や鬱は増え続けるのか?

全てに共通するのは、経済成長と比例して、こういう問題は増え続けるというグラフだ。そして、今の社会のテレビや新聞が伝えない事実を知らないければ自由にはなれないとも理解した。

### 廃材天国のライフスタイル

今、廃材天国での秋山家の生活は最先端のライフスタイルだと断言しよう。かと言って、

昔の原始生活に戻る事を目指してはいる。もちろん、○○反対だと、△△活動でもない。毎日、衣食住に関わる自分の好きな生活を日々実践するだけ。そこに、来るべき未来の生き方を模索するべく、同じような疑問を持つ仲間が集まっている。

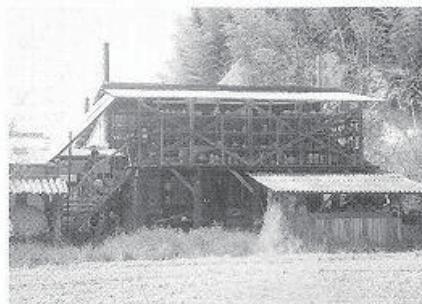
自分で廃材で家を建て、お米と野菜を自給し、料理、風呂、暖房は全て廃材の薪の生活。家の材料はマジに1本も木は買っていないし、アルミサッシ、基礎の石、土壁の土、と材料の全てが廃材利用。クズ米から麹を発酵させて、甘酒を仕込んだり、米と麦芽で米飴を仕込んだり。天然酵母を発酵させてパンを焼いたり、米飴はマクロビオティックスイーツの甘味として重宝する。車や電化製品も、もらいものを活用している。月にガソリン7000円と電気の3000円ぐらいいの経費でいている。灯油、ガス、水道代はなし。

井戸はツルハシとスコップで自分で掘って、解体現場から取ってきた電動ポンプでキッチン、風呂、洗濯に供給している。井戸掘りはプロの造園屋のおっちゃんに聞いて、三脚を作り滑車をつるしてオイルの20リットル缶を使って掘るノウハウを教えてもらった。自分で井戸を掘るなんて絶対に凄いと、友達が何人も集まってくれて大勢で掘った。

料理用のキッチンストーブは業務用のガス台を改造して、薪仕様に自作した。暖房のための薪ストーブは近所の鉄工所の廃材を溶接して、これも自作した。

しかもそれらの薪をわざわざ作る手間はほとんど無いに等しいと言ってもいい。大工さんの持ってくる小さな木端はキッチンストーブに、解体屋の持ってくる角材で家の材料にはならないようなのは風呂用に、造園屋の伐採した大きな丸太を暖房用の薪ストーブに、という具合に様々な廃材の供給に合わせて使う箇所を変えてある。自作薪ストーブに至っては、ちゃんと薪を50~60cmに切って持ってくれるので、それに合わせて大型のサイズに作った。廃材は業者にとっては産廃という処分代のかかるやっかいなものだけに、僕が欲しいと言えばジャンジャン持ってくれるというお互いに嬉しい関係が成り立っている。

そういう意味では、これだけまだ使えるものが捨てられてる世界一の経済大国だからこそ、家の材料からパソコンまで買わずに、何不自由しない生活を送れるというありがた



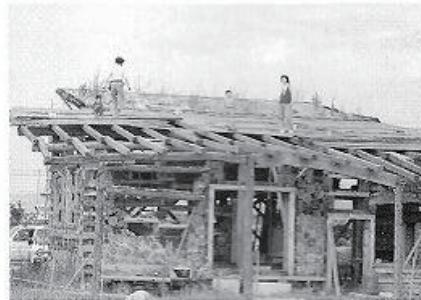
一軒目の廃材ハウス



建築中の二軒目廃材ハウス。廃材からは遊び道具も生まれる



小さな大工さん



「まず材料ありき」でデザインが決まる廃材建築



手掘りの井戸



子どもたちと一緒に作り



井戸は三脚を作り滑車をつるしてオイルの20リットル缶を使って掘った

い状況には感謝しないといけない。

いや、感謝ではなく、むしろ憂うべき状況と言った方がいい。アフリカやカンボジアで、こんなに無駄はやっていない。

## 廃材建築

セルフビルトを実行しようとした一番のきっかけは、陶芸の薪として建築解体の材木を解体屋からもらって燃料にし始めたからだ。

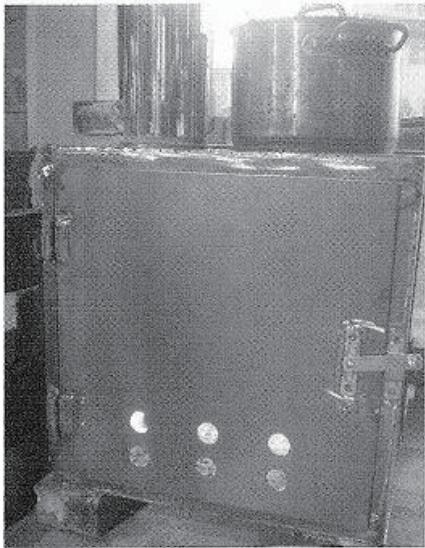
備前焼の先生なら1回の窯焚きで50~60万円の薪を焚く。香川県には薪屋はないばかりか、どう考えてもそんな経費は馬鹿らしい。現実、解体屋に頼めばダンブに山と積み込んで、角材や立派な松の梁なんかをどんどん持ってくれる。それで、窯に焚きながら、腐ってもなく、折れてもいない、綺麗な材をストックし始めた。当時はまさか、家が自分で建てられるとは思いもせずに。まあ、鳥小屋や倉庫ぐらい出来るかな?と思いつながら。



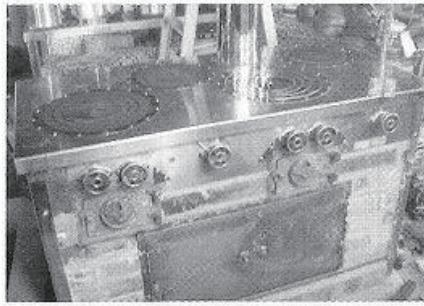
五右衛門風呂の焚き口



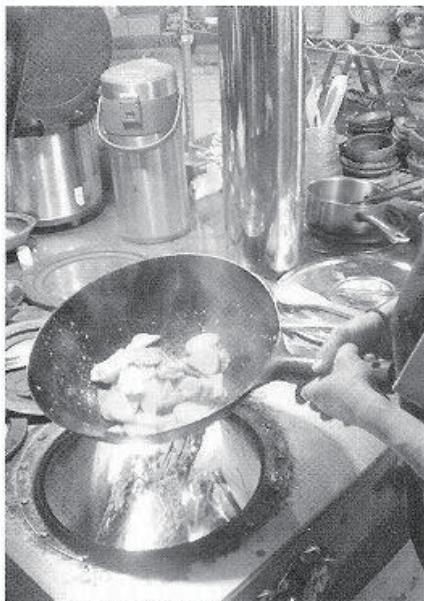
五右衛門風呂作り



鉄工所の廃材を溶接した自作の薪ストーブ



業務用のガス台を改造した自作のキッチンストーブ



季節季節の旬の野菜や小魚の恵みを薪生活でいただく



自作薪ストーブの煙突

そんな時に「廃材王国」長谷川豊、という本に出会った。まさに、自由な廃材建築の王国。ハセヤンこと長谷川さんも素人から始めて、たくさんの家を建てている。その本に希望をもらい、冗談半分で考え始めていたアイデアを実行はじめた。

一番良かったのは、その本は建築に関するノウハウじゃなく、姿勢や価値観について、目からウロコの常識を覆してくれる内容だったこと。素人の僕が建築工学なんかの本を

読んでも全然意味が無い。「廃材王国」に「家は5年に一度建てるもの」とあった。100年持つ日本建築の技術は確かに凄いけど、それを学ぶとすれば10年も大工さんに弟子入りしないといけない。「5年持てばいいや」というラフな発想や、何回も建てるによってスキルアップし、素人でもセルフビルトを可能にするコペルニクス的な発想の転換だった。ハセヤンも何軒も建てているうちに段々いろいろなスキルを身につけていった

そう。実際に僕も、今の廃材天国は二軒目のセルフビルトで、一軒目は丁度5年間住んで二軒目に移った。

特に一軒目の廃材ハウスの土地は百姓をしながら精力的なアート活動をしている大家さんに出会い、「そういうことなら俺の日の黒いうちは土地ぐらい自由に使えや」と無償で借りていた。

確かに二軒目の今の廃材天国は先祖代々の土地があつて出来ている。でも、一軒目が証明しているように、「自分で家作って自給自足がしたい!」と強烈なエネルギーを持って、発信しまくれば、必ずこういう出会いがある。ほんとうに自分のやりたい事に夫婦で向かっているから、そのエネルギーたるや尋常ではない。

自分で二軒家を建ててみて思うのは「設計図はない方がいい」。廃材で素人が家を建てるのに、設計図は足かせにならぬ助けにはならない。ひとつ作業をして、初めてふたつの作業が見えてくる。そういう、その場その場で閃くアイデアによって、その都度現場で対応する即興建築。いい意味では臨機応変、素人には何もないうちから完成図を頭の中に描くのは無理だし、頑張ってそれをするのはあまり楽しくない。

「机上の空論」とよく言うが、机の上で紙に向かったり、PCに向かうよりも常に現場に足を運んでそこで廃材の山を目の前にして、1/1の見取り図を地面に描く。一軒目も二軒目もそうしたし、今度作る時にもそうするだろう。それが一番具体的で分かりやすいし、次のイメージが作りやすい。

廃材建築の場合「まず材料ありき」でデザインが決まってくる。もの凄くたくさんの角材が手に入ったから、二階建ての工房の床と壁は全て4寸角の角ログというように。廃材の山を目の前にして、この丸太をここに使おうと閃く瞬間が最高。後はその実現の為に動くのみ。

素人である以上、決して複雑怪奇な伝統工法の大工さんのノミやカンナを使って「仕口」などには絶対に手を出さない。単純に、丸太を埋め込んで、コンクリートで固定して、その上に丸太を乗せて、ドリルで穴を開けてボルト固定、というように、細かいスキルは全くと言っていい程不要な「なんちゃって工法」。それで困ることは何ひとつない。

そもそも、家ってそこに住む人の使い勝手のいいように作られないといけない。昔の百姓屋敷だと、母屋の玄関から台所まで土

間でひとつづきになってたり、勝手口から出でてすぐに風呂があったり、そのすぐ横には納屋に隣接して牛小屋があって、毎日の世話がしやすいようになってる。これこそがジャパニーズ・バーマカルチャーの究極の形態だと言えよう。

バーマカルチャーにマニュアル化は不可能。その気候、地形とかの大きな要因だけじゃなく、そこに生活する人々のライフスタイルがあつての「使える家」のデザインが決められると言える。

別に僕は「自給自足」とか「手作りライフ」を押し付けるつもりもないし、これが絶対とは言いたくない。僕たち家族にとってこの形態が一番アットホームで、楽で、くつろげる癒しの空間なのだ。そういうように、その家族のライフスタイルによって、家のデザインなり、機能が決定されなければいけない。

みんながサラリーマンで、共稼ぎで、子どもも保育園や学校に行くのが当たり前で、帰ったら、大きな薄型テレビを見て、休みの日にはショッピングモールに出かけるという金太郎飴の人生で満足できる訳がない。

そこには自分発の、自分にフィットする、自分で選んだ価値じゃなく、作られた価値でしかないから。

何が自分にとってワクワクするのか？

何に金を払い、何で金を稼ぐのか？

毎日の貴重な人生の時間を何に費やすのか？

毎日寝たり起きたりする家、食事、仕事、子育て、そこに自分が心底納得のいくものを選択していないと、納得のいく人生が送れる筈がないではないか。

廃材天国の生活は決して、ストイックで大変な貧乏暮らしじゃない、お金をかけなくても遊びながら楽しんでいるだけ。いや、楽しむという言葉が悪い。楽しいどころじゃない、命が歓喜する毎日の生活。

自己実現を果たし、後悔の無い称賛の人生、僕は自画自賛と呼んでいる。めくるめくエンターテイメントな日常。

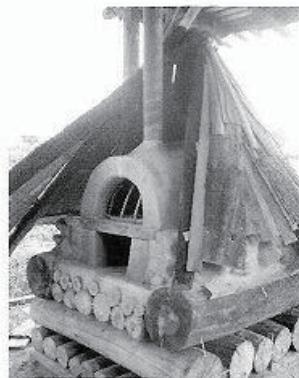
家作りに関して「法的にいいんですか？」という質問をよく受ける。僕の答えは常にYESだ。家に関しては「建築確認」というものがあるが、これは業者を取り締まる為の法律で、自分の土地に施主自身が工事をして家を建ててはいけないという法律はない。そういう個人の生活の領域に国家が介入で



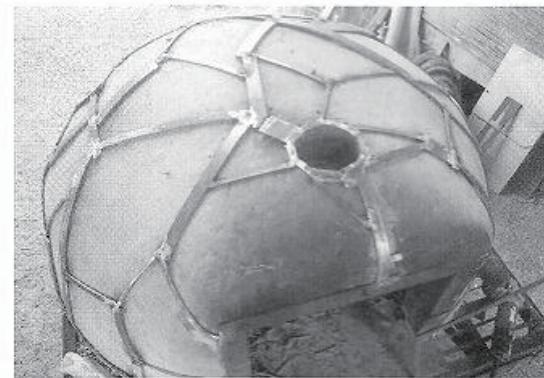
薪で炊いた玄米は格別の朝食



ピザ窯作りスタート



ピザ窯完成



けん引仕様に作った移動式ピザ窯。軽トラでけん引して、イベント会場で薪のピザを焼いて販売したりもする

きる訳がない。「ところでどうなんですか？」と行政の窓口に訪ねると、極めてグレーな部分ではあるに違いないけど。

## 毎日の食生活

その生活の中で、一番大切にしているのが玄米食をベースにした、日本の伝統食であり、未来の食「マクロビオティック」の食生活。「一物全体食」、これは穀類も野菜も皮を剥いたりせずに全部頂くという考え方。「身土不二」、これはその土地で採れるものを頂くという考え方。決して、ベジタリアンのように「悪いものを排除する」ような方向じゃなく、元々僕らの先祖が当たり前にしてきた、日本の伝統食。

さしつけその基本調味料は全て本醸造の古式製法で造られた本物だけを使う。

「さ」の砂糖は使わない。

「し」の塩は友人の師である「天草塩の会」の手作りの自然塩。

「す」は本醸造の米酢。

「せ」の醤油は国産の無農薬大豆や小麦だけで造った、小豆島産の杉樽仕込みのもの。

「そ」の味噌は無農薬大豆と自分たちで手植えした無農薬米を麹にして造った自家製の

味噌。

それに圧搾製法の油、これでバーフェクト。どれも小規模に家内製手工業の職人の仕事によって受け継がれてきた、伝統製法のもの。

僕らがお金を使う所は、こういうほんとうにその値打ちのあるものだけ。一升2800円の味噌は正当な価格だし、それを買うことで生産者を応援できるという意味にも繋がる。反対に一本120円の缶コーヒーなり、一本198円のペットボトルの醤油にはその値段の価値すらない、偽者。大手の食品メーカーの宣伝してるようなものは間違いなく偽者。それを買うという事はそれを応援するという行為に他ならない。ましてや全く中身のない、外食産業など絶対に利用しない。

毎朝、北海道の昆布と原本の干し椎茸でとった出汁に自家製味噌の味噌汁を飲む度に、日本に産まれて良かったーとしみじみ実感する。大袈裟じゃなく、こういう瞬間に心から滋味深い感動に震える。そう、この毎日の感動！これを味わう為にここで生活していると言っても過言じゃない。何か崇高な夢の為なんかじゃない、今、この瞬間の感動がここにある。

薪で炊いた玄米にじっくりと干してぬかと漬けた、たくあん漬けを乗せて頂く格別の



藁を使って手作りのポスト製作中



手植えの田んぼ



廃材建築のきっかけは、陶芸の薪に建築解体の木材をもったことからだった



焼き締めの陶芸

朝食。たまには子どもたちとお昼に地元の粉でさぬきうどんを手打ちする。もちろん出汁やかえしのクオリティーは最高のもの。さぬきうどんが有名になんでも100円のうどん屋は「本だし」のような偽出汁でしかやっていない。これを実現できる廃材天国の日常を自画自賛生活と言わずに何と言おうか! 玄米菜食と言っても、いわゆる菜食主義とは一線を画する。

「主義」で毎日の食生活を楽しめるか?

答えは否だ!

瀬戸内に生まれ育ち、この風土に根ざした、季節季節の旬の野菜や小魚の恵みがある。その恩恵を最大限に頂いて、命の営みに沿う生活の中の食とでも言おうか。ほんとの旬の美味しさは年に一度だけ。その贅沢を365日、毎日享受できる生活なのだから、いやたった365回しかない、しかも數十年しかない人生の今日の酒の肴を一步たりとも妥協することは断じてできない。

### パートナーの影子の影響

こういう生活を実現せしめてるのは何より、パートナーの影子の存在なしには語れない。彼女とは一軒目の完成と同時に結婚したけ

ど、建築前から僕に「せっかく自分で家建てるなら、電気もガスも水道もなしの生活をしたい!」と本気で目を輝かせながら楽しそうに言っていた。僕はなんちゃって大工なんで、電動ドリルやインパクトドライバーなしの家作りは考えられなかったんで、タジタジだった。

僕と違い彩子は子ども時代から、両親の影響で、地球環境問題に关心があり、他人と話しても彼女にとっては本質の無いわべだけのような窮屈な感じさえしてたそうだ。行きたいところは? と聞かれると、究極の環境調和社会の「江戸時代!」と答えていたそう。僕にとってはショックと絶望さえ感じた、「ネットワーク地球村」の講演会に一緒に行って、彩子は「未来がバラ色になった!」と言う。環境や未来のことに対する不安があって、なんでみんな気がつかないんだろう? と思いつながら生活していただけに、「そんな事考えるよりも自分に出来ることは全部やってみよう!」とスイッチが入ったそう。それから不耕起自然農を始め、漬物作りなど始めた。炭と塩で洗濯して、卵の殻で換気扇の掃除を実践、シャンプーや化粧も辞めた。

寝ても覚めても、自給的な暮らしをイメージして、もっと出来る事は何だろう? と考えた。ビニールや輪ゴムを使う時には、先住民

の人や江戸時代の人はどうしてたんやろう? と思いを馳せ、自分自身で作れない物の貴重さを実感、そして、自然に還らないものは出来るだけ使わない生活に憧れる。当然電気も自分で作れない訳で、電気を消して月明かりでお風呂に入った時の感覚にもの凄く感動したり。どんどん自分のやりたい事に没頭するほど、人からどう思われるか細かく考えなくなり、逆に人付き合いがスムーズになったとか。とにかく、自分のやりたい事が見つかり、それが実現していくことがこんなに気持ちよくて、幸せなんだと実感したのがこの頃。

そうしてたうちに、当時付き合ってた僕が家をセルフビルトして自給自足生活をしようと言いましたから、彼女にとってもピッタシのタイミングで結婚した。

僕から見て凄いのは、完全に物欲から開放されていて、ブランドのパックはおろか、服や雑貨に至るまで、新しいものに興味がないところ。例えば、洗濯機が壊れても「買いに行かなきゃ」と思わない。そういう時でも、まだ小さかった野遊とアルミの桶で足踏み洗濯を楽しんでいた。そうしているうちに、まだ使えるけど新型に買い換えたとかで、よそからお下がりの洗濯機が来る。子どもが産まれる度に布オシメ、子ども服、絵本、オモチャ、チャイルドシート、三輪車と全部回ってくる。そういうものも何ひとつとして買ったことはない。ネガティブに「お金がないから買えない」という発想じゃない。使えるものがこんなにあるんなら買う必要がない、という結論。

不景気、不景気、と今までの右肩上がりのグラフが停滞しただけで大騒ぎの今の日本。だって、車も冷蔵庫もテレビもみんな持っている訳で、これ以上不必要的需要を増やすとしても無理がある。僕らからすれば、何でも買うことなく手に入る、最高の状況だ。

### 教育

自宅出産や玄米菜食を実践している仲間には「ホームスクーリング」や「フリースクール」に通う子が多い。

僕はボストンの「サドベリーバレースクール」に行った経験もあって、「責任を持った自由」の空気を肌で感じてきた。

そこでは4歳から18歳の子どもたちが、ク

ラスわけもなく、同時に学んでいた。先生も居なければ、カリキュラムもチャイムもない。おおよそ、僕らの言う学校とはまるで別物。

何故4歳からかと言うと、創設者曰く、もうその頃には自我が形成されて、一人前の人間として扱われるべきと。もちろん、サポートするスタッフは居る。子どもの方からスタッフに授業を申し込めば応じてくれる。40年も続いてるし、ここの卒業生はアーティストや職人も多いけど、以外と大学に行く子が一番多いんだとか。

「自由と責任」という徹底的に厳しい環境の中でクラス分けもテストもないのに、子どもたちはハッキリとした自分の意見を持ち、大人と対等に喋る。この学校の空気は自立と自律を兼ね備えた、凛としたもの。自由=カオスのように思われがちな日本のそれとはまるで違う。

要は大人が子どもの邪魔をしないという事。全員、その子の存在全部が認められる事が一番大事。日本の教育は「競争、偏差値、○○ねばならない」のような企業戦士を生むのには役に立つかもしれないけど、その個人の一番やりたい事、すなわち「天職」にありつく為には難しすぎる。かと言って、親が学校に行くなどは決して言わない。あくまでも子どもたちに自由に選べるようにしている。野遊は遠足や運動会など、超ワクワクで行くし、本人が納得して結論を持たないといけないと思う。そういう意味では廃材天国の日常はあらゆる、生きていくのに必要な学習の宝庫であり、ホームスクーリングには最適な環境である。

要は、子どもたちが毎日いかに笑顔でいられるか？ それはウチのパロメータでもある。環境調和を目指し、玄米食をしながら、子どもに元気がないのでは意味が無い。とにかく徹底的にしたいことをする。その連続で、その子が自己実現していく。

## お金

そう言いながらも「でも最低限の現金収入はどうしているの？」とよく聞かれる。正直、僕ら夫婦は「お金がないと生きていけない」という現代の呪縛から開放されているんで、お金の心配は一切ない。自分たちが今、いくら持っているのか？ 今月いくら遣ったのか？ いくら収入があったのか？ を知らない。

面白かったのは4年前に、全国放送のテレビ番組に出て、月にいくら収入があるんですか？ と聞かれることになっていたので、電卓を持って、計算してびっくり！ 何と収入ゼロの月が年に2回もあり、年収は100万を切っていた。それでも、毎月の支払いが極めて少ないお陰で、何不自由しない生活を送っていた。

今の収入の多くは、彰子のマクロビオティックスイーツや玄米オムスピなどのイベント出店やケータリング。

ピザの石窯をけん引仕様に作り、軽トラでけん引して、イベント会場で薪のピザを焼いて販売したりもする。

年に数回は石窯を作るワークショップの講師としてもあちこちに出かけていく。今までに17基の窯を作ったことになる。

廃材天国でも、オルタナティブな価値觀を持った同士によるライブ、講演会、上映会、手作り市なども開催している。手作り市の時には薪のピザが大好評だし、彰子のマクロビオティックスイーツや玄米オムスピなども提供している。市の出店者は、香川県内外から薪の生活を実践している仲間や、マクロビオティック、オーガニック、手作りというキーワードに適う同士たちが20店以上も出店して、賑わう。その日の夕方からはライブや芝居の舞台なども開催する。

僕らがよその手作り市に出店することも多い。徳島や愛媛と、近隣のコアなオーガニックの手作り市も盛り上がってきている。

みんな、好きなことをして、楽しくて美味しいくて、身体にも負担のかからない品を作り、無農薬の生産者も需要が増えて、最終的には環境に負荷をかけないばかりか、環境を良くする仕事。もちろん食べ物ばかりじゃなく、布雜貨、手作り石鹼、ヘンプアクセサリー、マッサージといろんな種類の仲間がいる。

でも、廃材天国を毎日オープンさせるお店にする訳にはいかない。廃材建築もまだまだエンドレスで続いているし、手植えの田んぼ、不耕起自然農の畠、薪の生活、薪の陶芸、梅干しや味噌、漬物作り…とやりたい事はたくさんあるから、毎日営業するカフェやレストランにかかりきりになる訳にはいかないからだ。というように、大きく設備投資したり、経費をかけないことで、たまのイベントや出店、講師と、経済的に絶対にマイナスにはならない。

そもそも、借金して事業を起こすとか、家を建てるという発想さえしなければ、毎月のペイがない。毎月決まった支払いがないということは、もの凄い自由を手に入れられる事に他ならない。従って、毎月数十万の収入がないと暮らせないということは断じてない。そして、楽に生活出来るベースが整えば、多少なりと収入があった時に、必要な道具を段々買い揃えていけばいい。

特に使う頻度の高い道具はプロ仕様の本格的なものの方が永く使えるし、何より作業中に気持ちいい。

ウチなら、包丁は1万円以上、チェーンソーは10万以上するのが当然。食も家も出来たものを買う訳じゃないので、加工するための道具は一番大事と言ってもいい。

目的と手段で言えば、家が完成したり、本格的な無添加の味噌が出来る事が目的なのではない。作る工程そのもの、そのプロセスをしたいからやっているし、それそのものが目的である。同じクオリティーのものが出来たとしても、他人にやってもらったのでは意味が無いのである。

「仕事＝遊び＝生活」という事を大人も子どもも毎日実行する事で、ストレスも矛盾もない生活が実現している。

## 居候

最近、こういう生活なり、家作りを体験したい若者は少なくない。

僕のブログを見て、「見学に行きたいのですが？」というメールもしおちゅう。わざわざ見に来て、30分でひと通りの説明聞いても、おそらく!!!!??で終わってしまうし、僕も頻繁に来る見学者にいちいち応対していられない。だから、「折角来るなら泊まって、バッチリ作業する覚悟で来い！」と言うようしている。2、3日から1か月、長くて半年居た子もあった。

居候的に、家賃も食費もいらない代わりに、毎日の労働を共にしながら、うちのライフスタイルを学ぶという条件。「タダで居ればいいや」という姿勢はお断り。そういう意味では居候じゃなく「弟子」のように徹底的に学びたいという根性がないと無理。こちらは、廃材の家作り、自給自足や手作り、農的暮らしのノウハウを教える代わりに、「来てくれて助かったー！」と心底思えないと受け入れ

れる値打ちはないと思っている。

実際に、ここ最近の来訪者は増える一方で、助かる面と気を使ったりする面もある。せめて、僕に「この子にこんな仕事させて大丈夫かな?」と心配させずに、「自分のやりたい事を実現するためなら何でもやります!」という気合いを入れてきて欲しい。

大体、廃材の家作りにしても、自給自足にしても、エコロジーにしても、マニュアルはないし、ノウハウすら本に書いたりするのは難しい。「こうでなくてはならない」という何の根拠もない、現代の呪縛からの開放こそが、こういう生活を実現に導く最大の根幹だからだ。

ウチなり、様々なエコビレッジや、実践者の所にはそこにしかない独特の「空気」がある。その空気のような雰囲気を味わって、今まで、学校と会社、テレビと新聞で作られた囚われた価値観から自由になりさえすれば、むしろ誰でも出来るのだから。

環境を破壊したり戦争をするのは、実はもの凄い設備や訓練を要するけど、ピースでシャンティな半農半Xのこういう生活は、そういう不自然な努力を辞めるだけでいい。

## 選 択

それにしても、僕も随分と努力してきた方なので、「こうあらねばならない」という現代の呪縛から開放されたいがために「環境破壊に加担してはいけない」という落とし穴にはまって、環境意識のない人と意見がぶつかったりもした。

大切な事は「自分の役割は何か?」、「本当に自分のやりたいことは?」という事を本音でざっくばらんに話し合える仲間や家族との話し合いから、徐々に気づいていくものだと思う。「本当の」という所がミソで、地位や名声や物欲なども「やりたい、欲しい」と思ってきた訳だから、そこから自由になるのは容易ではない。それが「ほんとうにやりたい」事であれば、自分も楽しくて、家族も協力してくれ、近所の人たちにも喜ばれ、ひいては地球環境やよその国にも迷惑をかけない事じゃないと長続きしない。そういう事に合致したほんとうにやりたい事ならば、必ず実現するし、応援してくれたり、支援してくれたりしてどんどん広がっていくだろう。どうも廃材天国もそういう、宇宙のエネルギーのお陰で、何不自由することなく、最高の毎日を



味噌作り



手作りアイスクリーム



手作りのおやつと子どもたち



手作りの法事料理



法事も手作りで行われた

送っている。

でも成功している僕らにも毎日「選択肢」は訪れる。様々な細かい日常の選択から、人生の節目となる大きな選択まで。その「選択」の連続でその人の人生が構築される。「ほんとうに」自分が心からやりたい事であり、矛盾のない選択が求められている。

理想と現実は相反しない。現実という毎日の連続が、客観的に見れば理想的だったり、矛盾をはらんだ葛藤の人生にもなる。その大切な選択を誤らないためにも、常に余裕を持ち、自由な感性と健康で明朗でないといけない。いけないと言うよりは、それが人間本来の姿であり、自然な事であるからだ。ここへ来て、これだけ様々な問題という問題が極まってきているからこそ、不自然で、地球や宇宙の摂理にそぐわない事なり、モノは淘汰されるスピードも速くなるに違いない。

環境問題をはじめ、世界情勢、金融、戦争と、世界は目まぐるしく動いていく。だからこそ、僕はここで、毎日薪で玄米を炊いて生活する。決して、仙人のような隠遁生活という意味じゃない。丸亀の廃材天国からはイオンのモールに歩いていける距離にある。そこで、やりたい放題の自画自賛生活を開いて毎日ライブしている事に意味がある。「こっちのみーずはあーまいぞ!」と言いながら。

廃材天国では、僕がモーフィアスだ。  
「赤いカプセルを飲んで、目を覚ますのか?  
青いカプセルを飲んでこのまま眠り続けるの

か?」

「選択は自由だ!」

もちろん「マトリックス」のような「戦い」ではない。先にも書いたが、「遊び」「仕事」「生活」と、こういう毎日やっている事を分けて考えるとややこしくなる。廃材天国にとって、それらは全てイコールで結ばれる。

今回のテーマ「遊びのエコロジカルデザイン」とは、ウチでは当たり前の日常生活のデザインのこと。自分の徹底的にやりたい事を毎日する生活。ストレス発散のためにどこかに遊びに行くという事自体ナンセンスだ。それこそ、遊びも仕事も生活もエコロジーに反するようでは、自分自身が心底楽しめない。

利口な頭は常識で考えて無理なことには保守的なもの。理屈や常識じゃなく、自分の心の声を聞いて、ひとつずつ実行していると、自分の中に「やりたいけど出来ない」という矛盾は消えてなくなる。やりたいから取り組むし、やっているうちに益々スキルもつくし、頭が邪魔をしないようになる。

と、こういう事はあらゆる人、本、映画などで発信されているし、当たり前の普遍的な価値になりつつあると思いたい。

こういう新しい価値を持つ仲間が急速に増えているのを感じる。この勢いで加速すれば、僕らの子どもや孫の世代にはさぞかしほうへんな世界が約束されるだろう。今の僕らの選択によって。